

〔書評〕

陳偉主編『秦簡牘合集』（武漢大学出版社、2014年）
陳偉主編『秦簡牘合集 釈文注釈修訂本』（武漢大学出版社、2016年）

水 間 大 輔

一

紀元前221年、秦は六国統一を成し遂げた。その結果、秦が戦国時代以来築いてきた、君主を頂点とする専制国家体制・中央集権体制が全国へ拡大された。このような国家体制は徐々に形を変えながらも、基本的には清末へ至るまで、およそ二千年もの間受け継がれていく。前近代中国の国家体制を確立したという点で、戦国時代以降の秦の歴史は以前より注目されてきた。

戦国時代以降の秦の歴史は、司馬遷『史記』や劉向『戦国策』などの文献に比較的詳しく記されている。しかし、これらの文献はおおむね漢代になって編纂されたものであり、史実としての正確さに疑問の余地がないでもない。『史記』は秦の歴史を知るうえで最も重要な伝世文献であるが、これも前漢中期まで伝えられてきた文献などを基にしているとはいえ、編纂されたのは秦の滅亡から百年ほど後のことである。しかも、漢代の人々は秦の政治に対して批判的であり、漢代人によって記された文献は、秦に関する史実を多少歪めて伝えている可能性も否定できない。

また、秦がその後二千年にも及ぶ前近代中国の国家体制を確立したとい

われる割には、伝世文献には秦の法制の具体的内容に関する記述が少ない。それゆえかつては、秦の法制を受け継いだとされる漢の法制を根拠として、逆に秦の法制の内容を推測するという研究方法を採らざるをえなかった。

ところが、1975年に湖北省雲夢県で睡虎地第11号墓の発掘が行われ、中から秦の竹簡が大量に出土した。この中にはさまざまな文書が含まれているが、中でも注目されるのは法制文書と「日書」である。前者によって秦の法制の内容がかなりの部分まで明らかになった。また、後者は古いの書で、これまでその存在すら知られていなかったが、これによって新たな研究分野が開拓されることとなった。以後、今日に至るまで中国各地で秦の簡牘が続々と出土し、秦に関する史料は飛躍的に増大した。今日では、秦簡牘はむしろ逆に漢代史、中でも前漢初期の歴史を知るうえでも重要な史料となっている感さえある。

本稿で紹介する『秦簡牘合集』（以下『合集』と呼ぶ）は、これまでに出土した秦簡牘のうち、睡虎地・竜崗・郝家坪・周家台・岳山・放馬灘で出土した簡牘の図版・赤外線図版・釈文・注釈を内容とする。壹上・壹中・壹下・貳・参・肆の6冊から成り、構成は以下の通りである。

壹上

序言

睡虎地11号秦墓竹簡

睡虎地4号秦墓木牘

壹中

睡虎地11号秦墓竹簡図版（1：1）

睡虎地4号秦墓木牘図版（1：1）

壹下

睡虎地11号秦墓竹簡図版（2：1）

睡虎地4号秦墓木牘図版（2：1）

後記

貳

竜崗秦墓簡牘

郝家坪秦墓木牘

竜崗秦墓簡牘図版(1:1)

郝家坪秦墓木牘図版(1:1)

竜崗秦墓簡牘図版(2:1)

郝家坪秦墓木牘図版(2:1)

後記

参

周家台秦墓簡牘

岳山秦墓木牘

周家台秦墓簡牘図版(1:1)

岳山秦墓木牘図版(1:1)

周家台秦墓簡牘図版(2:1)

岳山秦墓木牘図版(2:1)

後記

肆

放馬灘秦墓簡牘

放馬灘秦墓簡牘図版(1:1)

放馬灘秦墓簡牘図版(2:1)

後記

本書に収録されている簡牘については、いずれも本書の刊行に先立ち、既にその図版と積文を収録した書や論文(以下「旧整理本」と総称する)が刊行・発表されているが、陳偉氏を中心とする武漢大学簡帛研究中心は、湖北省博物館・湖北省文物考古研究所・四川省文物考古研究院・荊州博物館・甘肅簡牘博物館と共同で、これらの簡牘に対して再整理を行い、その

研究成果を本書にまとめている。ただし、岳山秦牘第1号牘背面、第2号牘背面の図版のみは、本書によって初めて公表された。

本書の図版には「1:1」と「2:1」の二種類がある。前者は原寸大で、旧整理本にも掲載されている図版（以下「旧図版」と呼ぶ）を主とするが、再整理のときに撮影した赤外線図版を、旧図版の左側に添付しているところもある（簡牘番号に波線が付されている図版）。岳山秦牘の図版は赤外線図版のみが掲載されている。同じ旧図版であっても、本書の図版の方が旧整理本よりもおおむね鮮明である。一方、後者は2倍に拡大した図版で、旧図版と赤外線図版のうち、鮮明な方を掲載している。本書の図版のほとんどは白黒写真であるが、睡虎地秦牘第11号牘（1:1）、竜崗秦牘（1:1、2:1）、郝家坪秦牘（1:1）はカラー図版も掲載されている。

釈文は旧図版・赤外線図版や近年の研究成果に基づき、これまで公表されたものに修正が加えられている。①これまで「□」として釈読されていた字を釈読、②これまで釈文から脱けていた字を釈読、③これまでと異なる字に釈読、④断句を修正、⑤簡牘の排列を修正、などの修正が施されている。

各簡牘群にはさまざまな文書が含まれており、中には冊書先頭の簡の背面、あるいは末尾の簡の背面に文書の題目が記されているものもあるが（睡虎地秦簡「語書」・「效」・「封診式」・「日書」など）、ほとんどの文書にはそれがない。それらの文書については、簡牘の整理にあたった者が、内容を勘案して命名するのが常となっている。しかし、本書では最新の研究成果に基づき、睡虎地秦簡「編年記」を「葉書」、周家台秦簡「曆譜」を「三十四年質日」・「二世元年日」と改称している。

本書では簡牘の文章に詳細な注釈が施されている。睡虎地秦簡・竜崗秦簡・周家台秦簡の旧整理本にも簡潔な注釈が施されているが、本書ではそれを踏まえたうえで、先行研究の解釈を多数列挙するとともに、再整理者独自の注釈も付されている。日本人の研究成果も中国語に翻訳されているものを中心に、わずかながら引用されている。

『合集』の刊行よりおよそ1年余り後、『秦簡牘合集 积文注积修訂本』（以下「修訂本」と呼ぶ）が刊行された。本書は『合集』のうち积文・注积のみを掲載したもので、积文・注积に対して約200箇所の訂正を施している。壹・貳・参・肆の全4冊から成り、構成は以下の通りである。

壹

序言

睡虎地秦墓簡牘 上

睡虎地11号秦墓竹簡

貳

睡虎地秦墓簡牘 下

睡虎地11号秦墓竹簡

睡虎地4号秦墓木牘

後記

参

竜崗秦墓簡牘

周家台秦墓簡牘

岳山秦墓木牘

後記

肆

放馬灘秦墓簡牘

郝家坪秦墓木牘

後記

本書は「荆楚文庫」の一つとして刊行された。荆楚文庫とは近年編纂が開始された叢書で、現在でいう湖北省の地に関連する文献を集めたものである。睡虎地秦簡・竜崗秦簡・周家台秦簡・岳山秦牘は湖北省で出土したのに対し、郝家坪秦牘は四川省、放馬灘秦簡は甘肅省で出土している。修

訂本は荆楚文庫として刊行されたこともあり、湖北省出土の睡虎地秦簡などを壹～叁に配し、湖北省以外の放馬灘秦簡・郝家坪秦牘は最後の肆に配している。

二

次に、『合集』及び修訂本の学術的価値を挙げていきたい。

第一に、各簡牘群の赤外線図版と拡大図版を掲載していることである。近年では簡牘の整理本に赤外線図版や拡大図版を掲載するのが一般的となりつつあるが、『合集』に収録されている簡牘は、いずれも比較的古い時期に出土したもので（といっても1975～93年であるが）、当時は赤外線図版や拡大図版まで収録するのは一般的でなかった。それゆえ、我々は虫眼鏡で図版を拡大したり、図版をスキャナでとり込んで画像データ化し、それをパソコン上で拡大したり、画像処理を施すなどの工夫を重ねざるをえなかった。図版についていえば、『合集』はこれらの簡牘を近年整理が行われたものとはほぼ同じ水準で利用できるようにしたといえよう。より鮮明な図版が簡牘の研究にとって極めて有用であることはいうまでもない。

ただし、簡牘の赤外線図版は、通常の図版よりも墨跡がかえって不鮮明な場合もある。特に、『合集』の赤外線図版は再整理のときに撮影されたもので、簡牘の出土から既に数十年もの歳月を経ており、旧図版と比べると簡牘の劣化が目立つ。同様の問題は1983～84年に出土した張家山漢簡「二年律令」・「奏讞書」にも見られる。筆者も編纂に参加した『二年律令と奏讞書』（上海古籍出版社、2007年）は、二年律令と奏讞書を再整理したもので、図版は再整理のときに撮影した赤外線図版のみを掲載している。しかし、出土から20年以上経過しているため、竹簡の劣化が激しく、旧図版の方がかえって鮮明という竹簡も多々見られる。『合集』では旧図版を主とし、必要な箇所のみ赤外線図版を添付しているが、赤外線図版のみを掲載するよりはよいと思う。

第二に、积文や断句に最新の研究成果が反映されていることである。1975年に睡虎地秦簡が出土して間もなくの頃は、他に秦簡牘の出土例がなく、伝世文献や居延漢簡などを史料として解読するしかなかった。しかし、その後秦・漢の簡牘の出土・発見が相次ぎ、語句の用例などが極めて豊富になった。その結果、初期の研究成果、中でも积文や断句については修正を要する箇所が出てきた。例えば、睡虎地秦簡「封診式」の「有鞫」条には、

当騰騰皆為報

という記述が見えるが、旧整理本ではこれを、

当騰、騰皆為報

と句切っていた。しかし、2002年に出土した里耶秦牘には⁽¹⁾、

騰真書、当騰騰（8-66+8-208）

という表現が見える。『合集』及び修訂本ではこれを根拠の一つとして、

当騰騰、皆為報

と断句を改めている。

睡虎地秦簡の整理本は1990年に刊行された睡虎地秦墓竹簡整理小組編『睡虎地秦墓竹簡』（文物出版社）を最後として、いわば手つかずの状態に置かれていたので、『合集』及び修訂本の刊行により、ようやく最新の研究成果を反映したテキストがえられたといえよう。

第三に、極めて詳細な注釈が付されていることである。先行研究が豊富に引用されており、睡虎地秦簡が公表されて間もない頃のものから、最新の研究成果までさまざまである。これまであまり知られていなかった研究成果も多く、秦簡牘の解読のみならず、秦漢史の研究にとっても極めて有用である。

ただし、一つ残念に思うのは、フルスウェ（A. F. P. Hulswé）氏の睡虎地秦簡訳注“Remnants of Ch'in Law”（Leiden, E. J. Brill, 1985）が全く引用されていないことである。確かに、フルスウェ氏の訳注は比較的早期に発表されたもので、今となっては修正すべき点も多いが、現在でも傾聴に

値する解釈が多数提示されている⁽²⁾。例えば、睡虎地秦簡「秦律十八種」には、

禾・芻藁斃（撤）木・薦、輒上石数畧廷。勿用、復以薦蓋。

田律（第10簡）

という条文が見えるが、『睡虎地秦墓竹簡』の注釈では「薦蓋」の両字をいずれも動詞と解し、『合集』・修訂本ともにこの注釈をそのまま引用するにとどまっている。しかし、フルスウェ氏は「復以薦蓋」を「それを再度むしろで覆え」と訳し（24頁）、「薦」を名詞、「蓋」を動詞と解している。従うべきであろう。「禾・芻藁斃木・薦」の「薦」が名詞として用いられているので、「復以薦蓋」の「薦」も名詞である可能性が高い。しかも、北魏・賈思勰『齊民要術』巻7 造神麴並酒には、

春以单布覆甕、冬用薦蓋之。

とあり、本条と似たような表現が見えるが、「春以单布覆甕」の「单布」は名詞、「覆」は動詞としか解しえないから、これと対句になっている「冬用薦蓋之」の「薦」も名詞、「蓋」は動詞であるはずである。

三

『合集』及び修訂本に収録されている簡牘に限っていえば、今後は両書が旧整理本に代わり、基本的なテキストとして参照されることになるであろう。つまり、これらの簡牘の文を論文などで引用する際には、まず修訂本の釈文を読み、次に『合集』の図版を見て釈文を確認し、修訂本の注釈を読み、さらに必要とあらば旧整理本の注釈を読む、というのが一般的な手順となると思われる。

修訂本が刊行されたのは、『合集』の刊行後わずか1年余りのことであるが、短期間であるにもかかわらず、釈文・注釈に対して約200箇所もの訂正を施していることに、敬意を表したい。また、『合集』はB4判と大きく、全冊・全頁にわたり上質で厚い紙が用いられているので、かなりの

重量がある。最も厚い壹上に至っては、5キロ余りもあり、書棚から引っぱり出すだけでも一苦勞である。その点、修訂本はB5判と半分の大きさで、重量も各段に軽く、閲覽にも便利である。『合集』の他に修訂本が刊行されたことは、その学術的な価値のみならず、閲覽の利便性という点でも喜ばしいことである。

秦簡牘は今日、里耶秦簡・岳麓書院藏秦簡など、両書に収録されているもの以外にも多数発見されている。これらについては、『秦簡牘合集』第2輯の編纂も計画されているそうである（壹上9頁）。刊行を楽しみに待ちたい。

注

- (1) 里耶秦簡の牘番号・积文は陳偉主編『里耶秦簡牘校积』第1卷（武漢大学出版社、2012年）によった。
- (2) フルスウェ氏訳注の学術的な価値については、初山明「【書評】A. F. P. Hulswé, Remnants of Ch'in Law, Leiden: E. J. Brill, 1985, viii + 242pp.」（同氏『中国古代訴訟制度の研究』京都大学学術出版会、2006年。1986年原載）参照。

〔附記〕筆者の知る限りでは、『合集』に対する書評は本稿以外にも、湯浅邦弘・草野友子「秦簡牘の全容に迫る——陳偉主編『秦簡牘合集』」（『中国研究集刊』夜号、2015年）、藤田勝久「陳偉主編『秦簡牘合集』の刊行について」（『中国出土資料研究』第20号、2016年）がある。本稿と合わせて参照されたい。